

## No22 どの子にも効果的な授業力アップ

## 学習適応への小さな工夫(1)

授業の押さえどころは、発達段階によって多少違います。注意集中が続きにくい子などを、うまく学習に適応させるためのコツ・押さえどころについて、22号と23号で学年に沿って考えてみたいと思います。

## 1 小学校1・2年生の押さえどころ

<キーワード>まわりの子どもをほめる 楽しさと緊張感 空白の時間をつくらない 話は短く

(1)まわりのきちんとできている子どもを具体的にほめる。

(2)楽しいかわりを基本としながらも、緊張感を与えていく。

(3)空白の時間をつくらない。

(1)あまりほめられたことがない、けれども、まわりから認められたいという欲求をだれよりも持っているのがADHDの子どもたちです。まずは、「きちんとできている子どもをほめる」ことによって「こうすればほめられる」「正しい行動とはどうすることか」が分かるようにしていきます。

(2)いつもほめてばかりとか容認だけではだめですし、いつも厳しくきちんとしすぎているばかりでもだめです。ほめ言葉があふれる楽しい学級の中にも、時折緊張感をもちさせることがコツです。

(3)子どもたちがチョロチョロするのは、大半が「空白の時期」が生じた時です。何をするのか分からない時、やり方が分からない時、やることが終了して次に何をすればよいのか分からない時などいずれも、その「手立て」をたくさん考えておくことがコツです。

## 2 小学校3・4年生の押さえどころ

<キーワード>教室に学習とは違った文化を持ち込む 落ち着いた授業の出だし 助走をつけさせる

(1)学習とは違った文化を教室に持ち込み、自信をもたせる。

(2)チャイムと同時に子どもが興味を引く作業などから授業を開始する。

(3)学習へのきっかけづくり(助走)をつけさせる。

(1)学校の中で勉強だけで勝負していくには限界があります。そこで、学級に「裏文化」を持ち込みます。百人一首や将棋、ジグソーパズルなどの子も活躍できる場を意図的に設け、一つでもいいから自信がもてるものを作ります。一つのことに自信がもてるようになった子どもは、他のことでもがんばれるようになります。

(2)「落ち着いた」は、子どももですが、教師もです。作業的なものから入ることにより、お互いが安定した状態で授業に臨めます。

(3)それでもうまくいかない、興味を示さない子がいたら、始めの部分を少し手伝ってあげます。例えば、練習する漢字を2~3個好きな色のマーカーで書いてあげ「ここをなぞってみて」と声掛けするなど、その子が自分でやろうとするよう助走をつけてあげることがコツといえます。

## &lt;ポイント&gt;

1・2年生の頃多動だった児童も、3・4年生頃になると多動はおさまり衝動性が強くなってきます。不適切な行動については、これは絶対ダメであると教師が基準を決め、一貫性をもって指導することが大切ですが、少しでも改善できたことは、おおいに誉めることも、さらに大切です。

